赤と月と魔法使い

あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤と月と魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ７２５２Ｘ

【作者名】
あき

【あらすじ】
Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡと魔法先生ネギま！のクロスです。他のＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ作品も出てくるかもしれません。
ＥＸＴＲＡの女主人公とセイバーがネギま！の世界へというものです。
主人公がほとんどオリ主化しています。（原作でどんな力あるのかわかんなかったし・・・）
基本ネギま！の原作に沿っていきます。
処女作なので拙い部分が多々あると思いますが、読んでくださると

うれしいです。

※更新は不定期です。　※原作を一部ブレイクするかもしれません。

※百合です。

プロローグ（前書き）

始めましてあきといいます。
小説は初なので拙い文章だとは思いますが、読んでくださるとうれしいです。
ではどうぞ。

プロローグ

聖杯（ムーンセル）へ願いは伝えた。

これで漸くすべてが終わる・・・なのに何故私は消えていないのだろう・・・。

本来私はＮＰＣなのだから中枢にアクセスしたらイレギュラーとして消されるはず。願いを伝えるぐらいの時間はあるかもしれないと思っていたがそれも終わっている。

なら何故まだ聖杯の中を漂っているのか・・・消えるのなら早くしてほしい。

でないと願ってしまう。『彼女と居たい』と。

最後まで私といてくれたサーヴァント。聖杯戦争中、告白紛いな台詞を言ってきた彼女。その時は苦笑したが結局私も彼女に惚れていたのだろう。消える間際に自覚するなんて・・・でも、これはかなわない思い。私はもう消えてい

「よいのではないか奏者よ。」

彼女、セイバーの透き通った声が聞こえた。一瞬惚けてしまったが何故ここにセイバーがいるのだろう？　顔に出てしまっていたのかセイバーが

「奏者がどこにいようと余が隣にいるのはあたりまえであろう」

平然と言ってのけた・・・こっちは自覚したばかりなのにそんな事言われるとすごく恥ずかしい。

「それよりも願ったらよいではないか。それが奏者の願いなのだろう？」

「でも「死んでいるから、存在するはずがないから個人的な望みは願えない。などと言うつもりではないだろうな奏者よ」・・・」

先に言われてしまった。すっごい睨まれてる・・・。

「よいか奏者よ、余もすでに死んでおるし本来なら存在しないのだ。だがそんなことは気にする必要はあるまい。今こうして余と奏者は生きておる。それで十分だ、願ってはいけないなどとあるはずなかろう？」

本当にいいのだろうか、私が願っても。

「奏者は余と居たくはないのか？余は寂しい・・・」

・・・卑怯だ。そんな潤んだ瞳で見つめられたら願うしかないじゃないか。

「私もセイバーと一緒に居たいよ。」

もう迷いはない。セイバーが居てくれたらきっと大丈夫。

「ならば急がねば奏者よ、消えかかっている。」

「うん」

私たちは聖杯に願う

「「セイバー（奏者）と居たい」」

その瞬間私たちは光に包まれた・・・

プロローグ（後書き）

ど、どうでしょうか？こんな感じで大丈夫ですかね、非常に不安です。

これからネギま！の世界へ行きますが、あの願いで何で？と思うかもしれませんが作者の気まぐれです。深い意味はありません。

これおかしくね？などの指摘や感想をいただけるとありがたいです。

作者は文才ないのでそこで勉強させてもらいたいです。

今月中に続きを更新しようとおもいます。

第一話　月からの旅立ち（前書き）

思っていたよりも早く書けたので更新します。
楽しんでいただければうれしいです。

第一話　月からの旅立ち

――――少女は月から旅立った。聖杯戦争を終え彼女と生きていくために。
その世界で彼女たちはどう生きていくのだろうか。平穏を手に入れるのか、はたまた争いに巻き込まれるのか。
月は見守る。今までになかった記録を得るために。
月は彼女たちをどこへ導くのだろうか・・・

▲▽――――――――――――――――▽▲

光が収まり視界が開けるとそこは見知らぬ森の中だった。普通なら不安に襲われるかもしれないが、隣にはセイバーがいる。それだけで不安など消え去る。

「奏者よ大丈夫か？ケガなどはないか？」
「多分大丈夫だと思うけど、少し調べてみる。」

私は目を閉じ、自身の内面へ集中する。
セイバーは周囲に気を配ってくれている。
なら安心して自己に埋没できる。

身体機能（ハード）・・・異常なし　受肉を確認　聖杯（ムーンセル）とのラインを確認
魔術回路（ウィザード）・・・霊子化可能　端末なし　端末入手推奨
魔力量・・・聖杯（ムーンセル）から魔力供給あり・１００％　魔力漏れあり・

魔力供給の調整推奨

聖杯（ムーンセル）・・・サーヴァント維持状態問題なし　聖杯（ムーンセル）内の情報取得可能・・・色々とおかしな部分もあるけど、一つずつ確認していこう。

受肉しているのはあの願いの結果だろう。霊子虚構世界（セラフ）に居たときはデータだけで平気だったが現実の世界では肉体が必要だ（サーバントは別だが）。聖杯（ムーンセル）にある自分の元となった人物の記録からつくられたのだろう。聖杯（ムーンセル）とのラインはその名残だろうか？　まぁ考えてもわからないことはわからないし後回しにして他にまわろう。

端末がないのはおそらく聖杯（ムーンセル）に融けてしまったのだろう。自分もギリギリだったし。

魔力供給は２０％ぐらいで大丈夫かな。

聖杯（ムーンセル）からの魔力供給と情報取得はありがたいけど卑怯ではないだろうか・・・魔力が枯渇する事はないし、聖杯（ムーンセル）にない情報はないだろう。なにせｉｆの世界の情報まであるのだ。それを利用できるのだから知り得ない情報はないだろう。　まぁ引き出さないといけないから『森の中』だけではここがどこだかはわからない。ある程度の情報が必要なのか・・・少し面倒だな。

とりあえず今わかるのはこのくらいかな。

「とりあえず終わったよ。特に問題はないみたい。」

「そうか、それはよかった。あの時奏者は消えかかっていたからな。」

「あの時はありがとうセイバー。セイバーが来てくれなかったらあのまま消えてた。」

「当たり前のことをしたまでだ。余は奏者の剣であり、盾なのだか

ら。」

嬉しい事を言ってくれる。少し恥ずかしいが、先にここがどこか確認しなければ。もしかしたら危険な場所かもしれないし。

「セイバー、とりあえず周りに危険がないか探索してみよう。」

「賛成だ奏者よ。む・・・なにかが近づいてくる、気をつけよ奏者。」

セイバーに言われ周りに注意すると確かに何かが近づいてきている。低いが魔力も感じる、魔術師だろうか。しかし、私たちはこちらに来て何もしていないはずだ・・・セイバーに反応したのかな？

とりあえず一応いつでも戦えるようにはしておこう。

「奏者は余の後ろに。」

「うん。」

セイバーが前に立ち、剣を構えると

「いい月夜に何の用かな、侵入者。」

「・・・・・・」

木々の間から金髪の人形のように美しい少女と、まるで機械のような雰囲気を持つ長身の少女が現れた。

第一話　月からの旅立ち（後書き）

どうでしたでしょうか？まったく本編に進んでません・・・ｏｒｚ
聖杯の情報取得についてですが、あくまでも情報を取得するだけです。
基礎の魔法はそれだけで使えるかもしれませんが、レベルが上がると鍛錬を積まないと使えません。
本文の長さは短いですかね？感想に書いていただけるとありがたいです。
これからも更新していくので拙い文章だとは思いますが、読んでくださるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7252x/

赤と月と魔法使い

2011年10月20日06時26分発行